

VB2010クライシスの実態とソリューション

あなたの会社のコンピュータが寿命で動かなくなるリスクとは？

[第8回] (最終回)

VB2010クライシスの克服のための課題と提案

＜大不況とIT崩壊の二重苦の解消策を探る＞



納富 誠治 | Noutomi Seiji

BBC (ベスト・ブレイン・コンサルタント) グループ代表

■1971年大分大学経済学部卒。同年(株)日立製作所入社。世界初の3モーター3ヘッドカセットデッキD-4500を企画し成功する。80年独立し、(株)すかいらーくの社長ブレインとなり、81年同社経営顧問に就任すると同時に、日本システムデザイン(株)を設立する。日本初の経営・情報システムデザイナーとして、経営指導と情報システムデザインの両方を実行できる第一人者。すかいらーく、バンダイ、クイーンズ伊勢丹、堀場製作所等、100社を超える企業を指導し、99年BBCグループ代表に就任、現在に至る。著書に『省脳化システムリデザイン』等がある。

本連載は今回をもって終了となります。そこで最終回では、連載テーマである「VB2010クライシス」についての総括を述べたいと思います。

「VB2010クライシス」とは——一般に、ブロードバンドが普及する前の主流のシステム構成「クラ・サバ」方式では、今日のリアルタイム情報時代には対応できず、2010年までにweb化しないと、企業の存続に関わる一大事を招きかねない危機のこと——。上場企業や大手企業・団体では、1999年頃からweb化の波に押され、ほぼ移行が完了している一方で、レガシーな「クラ・サバ」方式は、日本全国で今も数万万台が稼働していると言われ、また、ITプロダクトメーカーは、サポート業務を徐々に終了しています。本連載では、このような事態について警鐘を鳴らすとともに、解消策を提起してきました。ところが、この解消策は、業界にもユーザ企業にもほとんど知られておらず、本連載の読者の方が数少ない良き理解者なのです。最終回では、如何にしてその壁を打ち破るかにスポットを当てて論じてみたいと思います。

1. ソフト開発新手法の普及を阻む業界の古い体質

今日、目覚ましい技術革新により、ハード

ウェアやネットワークの高性能化、高機能化が低価格で実現する一方で、ソフト開発においては、旧態依然とした昔ながらの手法から脱却できないまま、今日のIT不況の大きな要因になっています。今や人類の存亡を懸けたとも言える米国大統領の選任においてオバマ氏が選ばれたように、IT業界にも、ソフト開発の革新を実現するための大きなウエーブと幕末の坂本竜馬のような推進者が必要です。

そこで、筆者の知人でIT業界に大きな影響力をお持ちの方々にご協力いただき、現在、ビッグプロジェクトを推進中ですが、これにより打ち破るべき古い考えの壁とは、次のようなものです。

(1) 開発ツールは業界の首を絞めるだけ！

この考えは、殆どのソフト開発企業幹部の常識であると言っても過言ではありません。

図1にあるように、これまでに登場した革新的開発ツールは「CASE」に代表されるよ

うに、大々的にアピールされて多くの開発企業に導入され、そして大方「失敗」の烙印を押されるというパターンを繰り返してきました。その結果、今日、ソフト開発関係の業界人に「開発ツールは失敗する」という固定観念を植え付けてしまいました。従って、筆者が本連載でご紹介してきた「GeneXus」の活用例は、今や業界の常識に阻まれて、まず見ようともされないのが実態なのです。

汎用機の時代には、ロータス社の開発プラットフォーム「Notes/Domino」がかなり普及しましたが、web時代の対応に遅れて今は勢いがありません。また、NTTデータ社が開発したJava script系の開発プラットフォーム「intra-mart」は今日成功した部類に入りますが、ソフト開発業界を革新するまでの影響力はありませんでした。

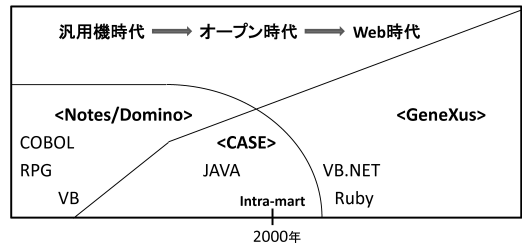
これらの多くは今後のソフト開発の生産性を飛躍的に増大させるものになると、一時は業界も積極的に推進したのですが、期待どおりの成果は出なかったのです。

ただ、昨年から騒がれている米国発の「BPM：ビジネス・プロセス・マネジメント」ツールが部分的にはありますが、プログラムの自動生成機能を謳って注目されたことは、「GeneXus」にとっても追い風になるかも知れません。

(2) 実態無視の（工数見積り）の弊害！

図2のように、今日のソフト開発の見積りは、必ず「工数（人月）×人月単価」で表されます。工数は必要な人数と開発期間を掛けて算出し、通常は人月という単位で表現されますが、この方法は誰が考えてもナンセンスです。SEの能力はトップランクと初心者では10倍差どころではないのにもかかわらず、平

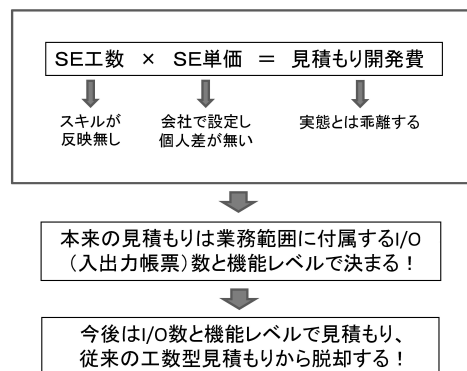
図1 代表的開発ツールの変遷



均的SEが行った場合の期間と平均的な単価の掛け合わせで算出するという意味のない方法が、今日まで続いているのです。これがIT業界の大きなボトルネックになっているのですが、肝心の業界人が「これでいいんだ」と思っているのです。変化は起こりません。ソフト開発企業から見れば、この方法は適当に見積もっておいて、実際のスタッフアサイン時に、ソフトの内容とスタッフ事情を勘案して利益を調整することができるので、都合が良いのです。今日はIT不況の中、値引き合戦が激しいため、要員のスキルを問わないこの方式の方が却って調整しやすいのでしょう。

これからは、この工数と単価は不要です。ソフトの見積もりは、本来、入出力の画面や帳票の数をベースに開発環境や難易度の違いで積み上げるべきであり、スタッフの数や期間が掛かるから高いということではナンセンスなのです。

図2 実態と掛け離れた見積もり方法



(3) 開発の一時費用よりも、ランニングコストや保守費用に目を向けよう！

オーダー開発の新システムを稼働した後、何もしない／起こらないということはありません。つまり、ソフトの改修や追加、開発後に発覚する設計ミスやプログラムのバグ等で、ユーザ企業はいつも頭を悩ませています。しかもそのための保守契約金は、年間当たり、開発費用の約10～15%ですから、1千万円のソフトでも月にすると10万円前後、即ち、SEの2、3日分位の工数分しかありませんので、通常は赤字になり易いのです。また、担当SEが次のプロジェクトに移っていることも多く、さらには、退職している場合には、契約義務はあるものの実際には効率が悪く、許されるなら辞退したいということも珍しくありません。

このように、ユーザも開発会社も、ともに困難を抱えているのが、ソフトの保守メンテナンス業務なのです。しかし、図3のように、「GeneXus」を活用すればユーザによる直接メンテナンスが容易なので、この問題は解消します。これからのIT業界を大発展させる可能性を秘めた「GeneXus」（詳細は第4回

(2009年2月号を参照)が、これまでの開発ツールの欠点を見事にクリアし、さらに今後のIT発展に不可欠である革新をもたらすツールであることを再認識いただければ幸いです。

2. ITの古い体質を打ち破る新方式とは!?

それでは、これからのIT業界に発展をもたらすソフト構築の革新とはどういうことかをおさらいしましょう。

(1) ソフトはユーザが作る！

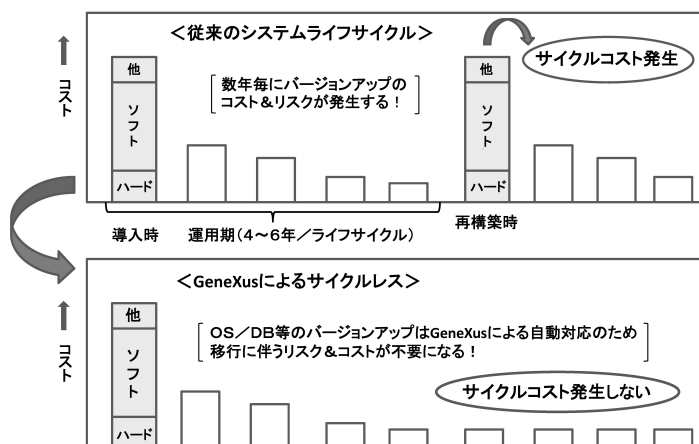
突然「ソフトはユーザが作る！」と言われたらビックリする人が多いかも知れませんが、実は「GeneXus」を用いれば可能なのです。ところが、これについてはソフトハウスの死滅を意味するとして、まずIT業界が猛反発をします。そして、本来、ユーザには大きなメリットがあるのですが、ユーザ側の情報システム担当も自分の業務責任の拡大に対して反対なのです。しかしながら、その反対の方々は、以下の点を考えてみてください。

①本来、業務はソフトを利用するユーザにしか分からないものであるが、外部SEに設計・開発させることに問題は無いのか？

②作ったソフトは社内の事情により変化するものであるが、外部依存でタイムリーに実行できるのか？

③現在開発されたソフトは、OS/DB等のインフラがバージョンアップするため、何年後かには再びソフト自体もバージョンアップする必要がある。コストと移行のリスクが生じることは問題ではないのか？

図3 ソフトのライフサイクルを打破する「GeneXus」



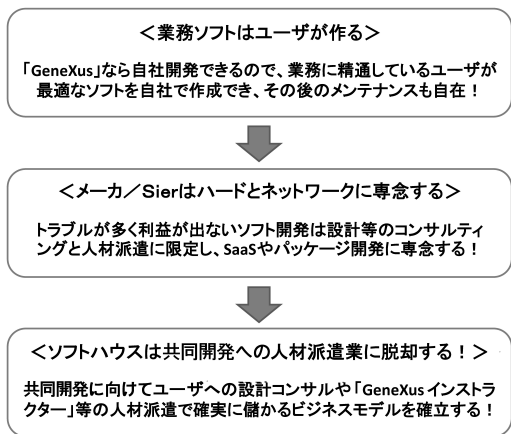
以上の問題点を克服する必要が無いと思う方が存在するでしょうか!? これらの課題を全面的に解消させるのが「GeneXus」であり、具体的には図4のような変革をもたらします。

図4 「GeneXus」がもたらすソフト構築の革新ポイント

- ① 要件定義ができればプログラムは自動生成!
「GeneXusインストラクター」がいればユーザでも社内開発&保守がOK!
- ② OS/開発言語はもちろん、DBまでも先に決定することなく自由に選択可能!
SEには負担の重い言語やDBの習得が基本的に不要となる!
- ③ I/O毎に動作の基本検証が可能となり、従来ブラックボックスだった開発が可視化され、現場のアグリを待ながらのスパイラル型開発が実現!
- ④ OS/DB等のバージョンアップにより陳腐化するソフトを数年サイクルで再構築する負担からGeneXusの機能により解放される!

このような革新が進むと、IT業界はどのように変化するのだろうかということが重要な関心事になりますが、筆者は図5のようになると推測しています。一言で言えば、ユーザ、業界双方がハッピーになる理想の姿が実現するということになると思います。

図5 IT不況を吹き飛ばすソフト開発のパラダイムシフト



本連載の終了に当たって、図6に「VB2010クライシス」のユーザ用チェック表を再度掲載しますので、読者の皆様には、是非、ご利用されている情報システム

が大丈夫かチェックいただきたいと思います。

本連載により、これまでITが長年なし得てこなかった課題とその解決のためのソリューションのベストプランをご理解いただければ幸いに思います。世界的な大不況に揺れるIT業界にとって、真の企業業績をアップさせる一番の手段が、「GeneXus」を中心とした様々な新方式により構成されるプランであることを、企業経営陣はもとより各界の読者の皆様に認識していただくことにより、この難局が打開され、企業経営陣から信頼されるIT業界の将来が拓かれることを衷心より祈念して、8回にわたる本連載の筆を置きたいと思えます。

ご愛読有り難うございました。

図6 VB2010クライシス診断早見表 (第1回図5再掲)

